

巻・頭・言

技術士の見栄とプライド

技術士になって12年経った。普通の会社で12年も働くとベテラン扱いである。どんな仕事でも一通りこなして、組織としてしての将来を見据え、経営的な視野を持ち、後輩の指導にあたる地位にいる筈である。

では、技術士会ではどうであろう。当初は右も左も分からなく、会う人会う人が皆、立派な人に見えて畏敬の念で接していたものである。ところが現在では知った顔が増えたせいで抱くのは親近感ばかり、初対面の人も年下の方が増えてきて、会員への勧誘のことばかり考えてしまう始末である。

また、あっちこちの委員会や会議に出席しても気兼ねなく意見を言えるようになり、技術士会の中でも中堅になったとも言えるのである意味では会社と同じある。

さて、ここからが本題である。

技術士になったのは、技術士会の中での活動が目的であったわけではない。技術士として「駆け出し」や「一人前」があるわけではない。「技術士とは、……」で始まるお決まりの内容どおりである。

困っているのは、私が技術士になった頃、技術士の英名がC.E. (Consulting Engineer) からP.E. (Professional Engineer) に衣替えしたことである。「専門家」という肩書が私を縛り付けるのだ。

私が目指したのはC.E. であった。IT技術の専門家であり、学会発表や特許出願もしていたのだが、専門家からコンサルティングに転身しようと思ったからである。

実際のところ仕事では、C.E. だろうがP.E. だろうが一向にに差し支えない。

小山田 応一 (おやまだ おういち)

技術士(情報工学/電気電子部門)

公益社団法人
日本技術士会北海道本部
エンジョイ・サイエンス
研究委員会代表
株式会社 通電技術



問題は、技術士として一般人と接するときの意識である。

エンジョイ・サイエンス研究委員会(以下、ES)の相手は子供である。たまに親もついてくるが。

殆どの場合、実験用教材は講師が自分で用意して、主題や理論的背景を復習しておく。出前授業の最後は質問時間であり、様々な質問がでる。殆どは、子どもでも納得できるような言葉で解答できるが、ときにはそんな解答を用意していない質問がくることがある。太陽についての出前授業を行ったときである。黒点やプロミネンスが観える望遠鏡を用意して、立派な機材で子どもたちは満足しただろうと思っていたときだった。最後に受けた質問が、「太陽のエネルギーの元は何ですか」であった。私は思わず「核融合だよ。」と答え、1秒後には自己嫌悪に陥ってしまった。「子供に分かるわけない！核融合自体が質問ではないか！？」という素人に専門用語を使って煙に巻くということをやってしまったからである。これこそ見栄である。しかも子供に対して、何と大人げない！物理は、私の部門ではないが、学生時代と就職してから数年は専門であったので、現在でも私が持っている技術士の部門よりも自信があったりするのだ。振り返ってみると同様の状況が何度もあったのに気がつく。

C.E. であれば何となく、心の中で「私は専門家ではないのですが、世の中では……」という逃げ口上と言える気がする。「そんなこと思うのは、おまえだけだ。」と言われそうな気もするが、専門家としてプライドを持って子供と接したいと思っている。